

文化大革命期の中国知識人——豊子愷の思想と作品について——

大野 公賀

はじめに

一九五〇年代半ば以降、中国では反右派闘争（一九五七—五八⁽¹⁾）から大躍進（一九五八—六〇⁽²⁾）、文化大革命（一九六六—七六。以下、文革と省略）へと続く政治的な流れの下、毛沢東の「文芸講和」⁽³⁾に基づき、知識人の大多数が思想改造の対象とされ、心身両面における直接的な批判や攻撃、迫害を受けた。

一九六六年六月一日、陳伯達⁽⁴⁾の率いる工作組の管理下、『人民日報』に社説「横扫一切牛鬼蛇神（すべての妖怪変化を一掃せよ）」が掲載された。この「牛鬼蛇神（妖怪変化）」とは仏教用語に由来する表現で、邪悪な人間に対する比喩として用いられるが、文革時には掃討されるべき対象を総称した。具体的には地主、富農、反革命分子、悪質分子、右派分子、裏切り者、スパイ、走資派、反動的學術權威などを指す。この「反動的學術權威」とは知識人のことであるが、彼らは「牛鬼蛇神」の中でも九番目という最下位の序列とされたことから特に「臭老九（九番目の鼻つまみ者）」と称された。また上述の九者以外であっても、造反派（文革派）によって打倒対象と認定され

た人は皆「牛鬼蛇神」とされた。

文革当時の冤罪について、楊克林は次のように述べている。

ある角度から見ると、文革は幾千もの冤罪と無数の個人の悲劇により構成されている。(中略) 罪を着せようとすれば理由はいくらでも見つかるもので、たとえば、出身がよくない、すでに結論が出ている過去の問題をもち出される、ほんのひと言が「反動的」だと言われる、学術的観点が「封建的、資本主義的、修正主義的」だと決めつけられる、食べる物や着る物が他の人と違う、過去にどういう歌を歌った、どういう劇に出た、という映画に出演した等々、あらゆる理由で勝手に「妖怪変化」と断定されたのである。(中略) こうして、冤罪は国中に溢れ、打倒されたおびただしい数の人々は、凌辱され、苦しめられた。⁽⁵⁾

文革時、自らに浴びせられた不当な批判や攻撃、迫害に対して、知識人は何を思い、また如何なる態度で応じたのであろうか。無論、それは各人各様であるが、彼らの経歴や身分、その際の心理状態などでいくつかのパターンに分類することが可能である。その一例として、以下に楊鳳城の分析を紹介したい。楊は文革中の中国知識人を、基本的に迫害や心理的衝撃を受けずに済んだ「年齢も若く、地位も低い人々」と、それ以外の大多数すなわち「文革中『革命の対象』となったためさまざまな『受難史』を持つ知識分子」の二つに大別し、後者について更にその心理状態を中心に以下の七つの類型に分けている。⁽⁶⁾

一、不満をかかえ、それ故の弁解タイプ

この類型に分類されるのは、主として革命経歴のある者や共産党員で、中華人民共和国建国後は一貫して重用され、それぞれの専門分野で影響力を持ち、指導的な立場にあった知識人である。彼らは、自らに対する批判や攻撃に対して、当初は「冤罪」であるとして大いなる不満を抱いたが、時の経過とともに弁解や闘争

が何の役にも立たないことを理解し、自己批判をすることで「解放」を手に入れようとした。

二、自責と罪悪感を抱くタイプ

このタイプは主として以下の二つに分けられる。一つは、知識人であると同時に指導的な立場の幹部である「革命知識分子」（共産党員やマルクス主義者）で、もう一つは「旧社会を経てきた知識分子」である。前者の多くは、自らに対する「批判を真摯に受け入れ、重大な政治的誤りを犯したと認める」が、その根底にあるのは深い自責の念である。それに対して、後者は「自責を感じると同時にさらにある種の根深い罪悪感を抱」いている。それは、後者の多くが出身や経歴的に「ブルジョワジーの思想継承者」であり、新中国においては「一貫して改造される側の人間」だからである。

三、平靜型と超然型

このグループに属するのは、文革の苦しみを味わいつつも「世の中の出来事を洞察し、希望を見いだすことができないがため、逆境に安んじ、苦しみの中で生き残るすべを求め、苦しみの中に喜びを見いだす」タイプの知識人である。無論、彼らのすべてが当初からこのような透徹した境地に至っていた訳ではない。しかし、ある日を境にすべてを超越したかの如く、自らの置かれた厳しい現実に対して、時にユーモアを交えながら超然と立ち向かうようになる。

四、幻滅と絶望のタイプ

このタイプの知識人の多くは、建国後、共産党との関わりにおいて「極めて積極的で、非常に大きな信任を得、一貫して大きな幸運に恵まれてきた」にも関わらず、文革期に「突如革命の対象となった者たち」である。彼らの多くは、立場の急激な変化や長期にわたって繰り返される苦難による精神的打撃から「幻滅と絶

望」へと追い詰められていった。そのため精神面で異常を起こし、文革終結後もその状態から快復できない者や自殺することでこの状況から逃れようとする者も少なからずいた。

五、憤怒と抗争タイプ

このタイプの知識人もまた、ほとんどは「一貫して共産党の事業に忠誠を尽くしており、マルクス主義の理論、方法と党の要求を遵守し専門研究と文芸創作に努力していると固く信じている」人々である。彼らは自らに対する批判、攻撃に対して、自分の仕事や作品における誤りは認めながらも、「反党、反社会主義、反毛沢東思想」「資本主義の道を歩む実権派」「黒い仲間」「裏切り者」「スパイ」などの罪名は認めず、抗弁の姿勢を見せた。

六、悲惨と憂鬱タイプ

これは、一つのタイプというよりは、むしろ文革当時に批判攻撃の対象とされた知識人の中に普遍的にみられた心理状態である。当時、程度の差こそあれ、大多数の知識人は「国家、民族、個人の運命に対する憂慮や、政治、文化、経済、社会に対する不安」に怯えつつ「失望、苦悶、困惑、焦慮、期待」の混在する状況を生きていた。

七、暗黒の中でもがくタイプ

上述の六つのタイプが主として、中華人民共和国の建国過程で重要な役割を果たし、指導的な立場にあった幹部であったのに対し、このタイプは「批判精神に富む覚醒した若い」世代の知識人である。彼らは文革に際して「熱狂し、困惑し、幻滅した後、冷静に文革の災いの性質を認識」し、アングラ文学作品を通じて「明確に反抗と真理追求の精神を表現」した。

上述の七つのタイプのうち、第六類型は当時のほとんどの知識人に普遍的にみられた心理状態であり、また第七類型は比較的若い世代の新知識人であることから、文革に際して直接的に批判や攻撃、迫害を受けた知識人は主として第一〜第五類型のいずれかに属すると考えられる。新中国における彼らの立場に共通して言えるのは、共産党の権力掌握や建国に功績があった者として国家から認められ、文革発動時には社会的に高い地位にあり、経済的にも優遇されていたという点である。そのような背景を考えると、第一・第二・第四・第五類型の心理状態は理解しやすく、またこれら四グループの状況は比較的類似している。それに対して、第三類型は他の四類型とは異なった様相を示している。

楊鳳城は第三類型の例として、劇作家の陳白塵⁽⁷⁾、作家の謝冰心⁽⁸⁾、劇作家の夏衍⁽⁹⁾、社会学・人類学者の費孝通⁽¹⁰⁾などを挙げている。彼らは皆、自らの置かれた状況や罪状に表立って不平や不満をこぼすこともなく、課せられた肉体力労働や思想改造のための作業を淡々とこなし、流れに身を任せるかの如く日々を淡々と過ごし、わずかの余暇に創作活動や知的活動を行うことで、自らの精神の安定をはかっていた。果たして、その内面は如何なるものであったのだろうか。小論では、この第三類型「平静型と超然型」の一例として豊子愷を取り上げ、文革期の活動や作品、書簡を中心に、当時の豊子愷の心理状態を整理し、その背景をなした思想について考察したいと思う。

一．豊子愷について

初めに豊について簡単に述べておきたい。豊子愷（二八九八―一九七五）は浙江省石門県（現、浙江省桐郷市）出身で、一九二〇年代半ば以降、美術や音楽、文学、翻訳、教育など多方面で活躍した知識人である。豊は高僧弘一法師（李叔同⁽¹¹⁾）の弟子としても知られており、仏教的倫理観に基づいた作品も多いことから、豊に対して敬虔な

仏教徒という印象を抱く人も多いが、思想的にはむしろ自由と平等を重んずるリベラリストである。

中華民国期に豊子愷の名を広く知らしめたのは、「子愷漫画」と呼ばれる独自のイラストや『縁縁堂隨筆』などの著述で、当時上海など都市部の新興市民層の間で豊子愷の名を知らない者はいない程であった。豊はまた教育の改革や普及にも熱心で、当時の一般的な学校とは制度も授業内容もまったく異なる新式の立達学園や、青少年向けの書籍や雑誌、教科書の出版と販売を営む開明書店の創設に関与した。

抗日戦争中は一九三七年一月から四六年九月まで家族や親戚十数名とともに国内奥地を移動しつつ、抗戦文芸に従事した。終戦後は定住の地を求めて台湾や厦門、香港などを訪れるが、最終的には一九四九年四月に上海に戻った。中華人民共和国の成立後、多くの知識人と同様に豊も『護生画集』⁽¹⁴⁾などの例外を除いては基本的にイラストや散文などの創作を停止し、ロシア語や日本語の翻訳に活動の中心を移していった。

豊子愷の戦後の翻訳作品の代表作として『源氏物語』が挙げられる。これは人民文学出版社の委託を受けて一九六一年夏頃から始められ、一九六五年秋に完成した⁽¹⁵⁾。豊子愷は翻訳原稿を少しずつ北京に郵送していたが、担当編集者の文潔若が最後の原稿を受け取ったのは、文が河南省林県での「四清運動」⁽¹⁶⁾を終えて北京に戻って来た一九六六年五月のことであった。この時には既にこうした作品の出版は不可能な状況にあり、豊子愷訳『源氏物語』が北京の人民文学出版社から上中下の三巻本として出版されたのは文革終結後、一九八〇年以降のことである。

新中国において豊子愷が創作を避けるようになった背景について、豊の弟子で、豊とともに上海美術界大会（一九五〇年）に出席した銭君匋は次のように記している。当時、毛沢東の「文芸講和」に基づき、文学や芸術は「労働者・農民・兵士の要求に応じて大衆政治家の意見をまとめあげて精錬し、再び大衆に戻すこと、すなわち共産党の政策を民衆に宣伝啓蒙し、民衆の要求を党に伝えるメディアである」と規定⁽¹⁸⁾されていたが、このような風潮に対

して豊子愷は上海美術界大会の席上、次のように述べた。

絵画の進むべき道に関して、工農兵への奉仕という点については、今もう既に同志各位が皆、話をされた。工農兵を褒め称えること、これは必ずや、なすべきことである。しかし、私が思うに、新中国以前に描かれた梅蘭竹菊のようなものも、やはり描かれるべきである。それは一日仕事をして疲れた時、夜は家で休まねばならず、そうした時にはやはりこうしたものが必要だからである。「工農兵のために」というのは最優先すべきことではあるが、梅蘭竹菊のような「四君子」は疲労の回復に有益なのである。

豊子愷のこの発言に対して賛同を示す者がいる一方で、激しい批判を加える者もあり、「梅蘭竹菊のような画題は古臭く、時代遅れで、新中国では工農兵を描くべきだ」等々の言葉が浴びせられた。これは豊が新中国で初めて受けた公的な批判であったが、これに危険を察知したのか、豊はこれ以降、美術について論じることを避け、活動の中心を翻訳へと移していった。⁽¹⁹⁾

二. 新中国建国から文革発動まで

政治から一線を画さんとする意思とは裏腹に、豊子愷は一九四九年八月共産党の指導による中華全国美術工作者協会（現、中国美術家協会）上海分会の主席構成員の一名に選出された。翌年には、上海市第一回文学芸術工作者代表大会で美術界代表者の一人に、また上海市第一回文学芸術工作者連合会では理事に選ばれている。その後は一九五八年に上海市第三回人民代表大会代表、全国政治協商會議委員、一九六〇年には上海中国画院院長、中国对外文化協会上海分会副会長などの要職に任じられるなど、豊もまた多くの知識人と同様、否応なく体制へと組み込まれていった。

反右派闘争の後、出版物に対する全面的な検査や統制も始まり、豊子愷も言動に細心の注意を払うようになった。しかし、一九六〇年冬に経済調整期に入ると、文芸学術界にもまた比較的自由な雰囲気が見られるようになった。一九六二年四月、中共中央宣伝部から劉少奇⁽²⁰⁾国家主席の名前で「当面の文学芸術工作の若干の問題に関する意見草案」（略称「文芸八条」）が下達されると、その傾向は更に強まった。同第一条では「百花斉放・百家争鳴」方針の更なる貫徹執行が宣言された。「百花斉放・百家争鳴」とは一九五六年五月に中国共産党宣伝部が提出した方針で、知識人に対して独立思考や自由な弁論、創作、批判が提唱されたが、一九五七年六月には方針が一転し、反右派闘争につながる思想弾圧が展開された。

反右派闘争や大躍進等の失敗を経て、一九六二年四月に「百花斉放・百家争鳴」方針は再び日の目を見た訳である。こうした状況の下、豊子愷は一九六二年五月八日の上海市第二次中華全国文学芸術工作者代表大会で上海市中華全国文学芸術界連合会副主席に選出され、翌日の会議の席上で、百花斉放・百家争鳴に関して次のように述べた。この発言は「我作了四首詩」との題で、五月一二日の『解放日報』に発表された⁽²¹⁾。

百花斉放が呼びかけられてから既に何年も過ぎ、確かに既に多くの花が開いた。しかし、これまでに咲いた花は大部分が大きな花や有名な花で、ほとんどの花に何らかの意味が込められている。（中略）こうした花の他にも小さな花や名もなき花もたくさんあるのだが、そうした花はまだちゃんと花開いてはいない。「名も知れぬ花はことのほか美しい⁽²²⁾」という。小さな花や名もなき花にも良い香りの花や美しい花もあり、こうした花々も咲かせるべきである。そうしてこそ、本場に「百花斉放」といえるのである。更に言うならば、それが香りのよい花、咲くべき花だと認めたのなら、その花は自分で成長させるのが一番よい。そうした花が成長するのを「手伝う」べきではなく、干渉すべきではない。

同年、豊子愷は飼い猫を題材とした随筆「阿咪」⁽²³⁾を発表したが、この作品は毛沢東を攻撃する「毒草」と認定された。それは、この猫（阿咪）以前に飼っていたトラ猫の綽名「猫伯伯（Mao bobo）」が毛沢東に対する敬称「毛伯伯（Mao bobo）」に通じることから、毛沢東に対する「影射（当てこすり）」とされたためである。発表当時は出版社内での「消毒」だけで収まり、その後の豊の活動に影響を及ぼすことはなかったが、文革期には上述の「我作了四首詩」とともに批判罪状の一つとされた。⁽²⁵⁾

上記の「阿咪」に関する「消毒」であるが、これは猫に付けた「伯伯（おじさん）」という綽名について豊子愷が説明した以下の文章のうち、傍線箇所が編集部内部審査により削除されたのである。⁽²⁶⁾

私の田舎では、伯伯とは必ずしも敬称ではない。「幽霊」は「幽霊伯伯」で、泥棒は「泥棒伯伯」、皇帝は「皇帝伯伯」である。だから猫のことを「猫伯伯」と呼んでも差し支えないだろう。だいたい普通と違って、人の注目を集めるような人なら、誰のことも皮肉をこめて「伯伯」と呼んでも構わないのだ。

随筆「阿咪」で、豊子愷は以前から愛猫を題材に文章を書きたかったが、そのような文章は「世間の道理にも人の感情にも無益」なので執筆を諦めていたが、今回は「世間や他人のことは気にしないことにした」と述べ、さらに「たとえ鼠をとらない猫でも人生に功績がある。それならば私が今、猫のことを書いてもおそらく非難を受けることはないだろう」と記している。この随筆の発表された時期を考えると、豊子愷の「たとえ鼠をとらない猫でも」という発言から、鄧小平の有名な猫論すなわち「黒猫にしろ、白猫にしろ、鼠を捕まえるのが良い猫だ」という言葉⁽²⁷⁾を想起した読者は当時少なくなかったであろう。愛猫について語った、豊の一見ユーモラスな文章はその根底に、文芸を政策宣伝のための道具と規定する中国共産党の文芸路線、更にはその根底にある毛沢東の「文芸講和」についての豊子愷の痛切な皮肉を隠していたとも考えられるのである。⁽²⁸⁾

もっとも豊子愷がこのような文章を書いたのは、当時の文芸界に前述の「文芸八条」に象徴されるような、比較的自由な雰囲気があったからであることは言うまでもない。こうした雰囲気は、一九六三年一二月に毛沢東が整風を指示するまで続いたが、翌六四年の春に文化革命五人小組が組織されると、状況は徐々に変化していった。

三・文革期

前述のように、一九六六年六月一日の『人民日報』に「横扫一切牛鬼蛇神（すべての妖怪変化を「掃せよ）」との社説が発表され、「破四旧（人民を毒する旧思想・旧文化・旧風俗・旧習慣の徹底的な打破）」が提唱された。それを受けて、各地で「牛鬼蛇神」への攻撃が開始された。豊子愷に対しても、早くも同年六月六日には、上海画院内に批判のための大字報が貼り出された。文革の発動とともに豊子愷は上海市の十大重点批判闘争対象の一人とされ、「反動學術權威」「反共產黨主義者」「反革命黑画家」などのレッテルを貼られ、その作品は「毒草」「黒画」であるとして他人への譲渡や販売は無論のこと、すべての創作活動が禁じられた。豊はまた、作家の巴金⁽²⁹⁾や京劇俳優の周信芳⁽³⁰⁾と並んで、張春橋⁽³¹⁾による上海の三大攻撃対象ともされた⁽³²⁾。

当時、豊に向けられた批判理由は、他の知識人と同様に共産党の政策や毛沢東の革命文芸路線に批判的であるというもので、具体的には中華民国期および百花斉放・百家争鳴期の作品や活動に見られる個人主義や反戦論、そして生涯を通じての仏教信仰が罪状とされた。文革当時、批判攻撃された豊子愷の作品の一つに「砲弾作花瓶」と題されたイラストがある。このタイトルは「砲弾を花瓶にする」という意味で、花瓶代わりの砲弾に生けられた蓮の花が美しく描かれている。豊子愷はこのモチーフを好み、タイトルや図の配置に多少の相違はあるものの、同様なモチーフの作品を戦中から戦後にかけて何度も描いている。このタイトルや図柄からも明らかのように、そこには

豊子愷の平和への願いが込められている。文革期には、この作品は「平和主義を鼓吹する代表作」であるとして批判されたのである。この背景には、一九五六年にソ連でスターリンの後継者となったフルシチョフが提唱した平和共存論や、それを基盤とする米ソ協調および中ソ対立が指摘される⁽³³⁾。また、前述の愛猫に関する随筆「阿咪」も、毛沢東を攻撃する「大毒草」であるとされた。このように客観的には決して「影射」とは思えないような作品が次々と「影射」とされ、批判攻撃の理由となった⁽³⁴⁾。また、豊子愷は前述のように開明書店の設立に関与しており、株主でもあった。開明書店の業績は概して好調であり、豊子愷が株から得た利潤も少なくなかったため、豊は「資本金」であるとの理由からも攻撃された⁽³⁵⁾。

文革期、七〇代という高齢にも関わらず、豊子愷も多くの知識人と同様に日常的に市内引き回しや、紅衛兵による自宅搜索、暴行などの直接的な攻撃や迫害を受けた⁽³⁶⁾。自宅は紅衛兵に占拠され、金品や絵画、書籍、電化製品などが没収された。前述のように、豊子愷は当時中国画院院長の職にあったため、文革直後は主として画院で審査などを受けている。画院や上海美術学校に設置された「牛棚（牛小屋）」⁽³⁷⁾に幽閉され、批判対象の中心人物として激しい攻撃にさらされることも多々あった。豊子愷を集中的に批判攻撃するための大会も開かれ、豊の罪状を連ねた冊子も出版された⁽³⁸⁾。一九六九年の秋から冬には上海市郊外の港口曹行人民公社大隊に下放されている⁽³⁹⁾。一九六九年には社会も少し落ち着きを取り戻し、「解放」される知識人も増えてきたが、豊子愷は依然として攻撃対象のままであった。豊は画院院長以外にも上海市美術協会主席や全国政治協商委員などを歴任していたため、その審査は中央に属し、決定が遅れたためである。画院の未解放者からは自殺者も現れ、豊子愷についても自殺の噂が流れたという⁽⁴⁰⁾。

しかし、このような苛酷な状況にも関わらず、豊子愷は比較的早い時期から達観の境地に到達していたようであ

る。豊子愷の四女である豊一吟⁽⁴¹⁾の回想によると、文革開始当初は豊子愷も状況が把握できず、闘争集会の後は常にかなり緊迫した様子であったが、ある日を境に豊はすべてを冷静に傍観するようになり、常に泰然自若の態度を崩さず、どのような無情な批判闘争にも、残酷な試練にも全く動じなくなったという。それ以降、豊子愷にとって「牛棚」は「參禪」の場に、そして批判闘争は「演技」となった。夜の黄浦江での引き回しは「浦江夜遊」であり、「牛棚」に呼び出されるのは手洗いに立つようなものであった。上海美術学校に監禁された折には、リュウマチ治療のための薬と称して家族にお酒を運ばせ、監禁された仲間とともに楽しんだという⁽⁴²⁾。

文革は豊子愷の精神生活には影響しなかったが、健康は徐々に蝕まれていった。特に下放以降は過酷な生活環境と肉体労働の負担から持病の肺が悪化し、一九七〇年二月には中毒性肺炎と結核の治療のために上海市内の淮海医院に入院したが、同医院の正門近くには豊子愷を批判するための掲示板が設けられた⁽⁴³⁾。肺病は根治には至らず、退院後は自宅療養の身となった。七〇歳を超えた豊子愷にとって病状の悪化は決して望ましいことではなかったが、自宅に戻れたことは何物にも代えがたい喜びであった。豊子愷は一九六六年以降、イラストや随筆など一切の創作活動を禁じられていたが、早朝のわずかな自由時間を利用して自分の楽しみのためだけに秘密裏に創作を続けていた。自宅謹慎となったことで、下放によって断念せざるを得なかったこの創作活動を再開させることが出来たのは豊にとって正に望外の喜びであった。

四．秘密裏の創作活動

こうした秘密裏の創作活動の一環として、豊子愷は一九七一年には人生最後の画集『敝箒自珍』と随筆集『緑縁堂統筆』⁽⁴⁴⁾の作成を開始した。『敝箒自珍』に収められたのは、文革中に失われ、一九七一年に秘密裏に描きなおし

た作品である。この画集の題名『敝箒自珍』とは「たとえ質が悪くても、自分の物は良く見える」という意味である。このような題名をつけた理由として、豊子愷は「甚だ倉卒に描いてはいるが、描く力はむしろ昔よりも優れていると思う」からだと述べている。⁽⁴⁵⁾この画集に、文革初期に「黒画」として批判された作品を複数収めていることを考えると、たとえ当局が自分の絵を「黒画」と認定しても、自分が当局の権威を認めない以上、その批判は少しも意に介さないという、豊子愷の抵抗精神がうかがわれる。

豊子愷は『敝箒自珍』と『縁縁堂続筆』を完成させると、日本語の仏教解釈書『大乘起信論新釈』の翻訳にとりかかった。同書は、インドの馬鳴菩薩の『大乘起信論』を日本人仏教学者の湯次了栄ゆすきりょうえいが翻訳したものである。⁽⁴⁶⁾従来、豊子愷は弘一法師の影響で仏教徒になったとされているが、豊は息子の豊新枚宛ての書簡で、若い時に『大乘起信論新釈』を読んで感動し、仏教を信じるようになったと述べている。⁽⁴⁷⁾同書は豊子愷の仏教信仰の起点をなすと考えられるが、文革当時は宗教活動は全面的に禁止されており、仏教書を所有しているだけでも本人のみならず、その家族にも累の及ぶ非常に危険な行為であった。上海文芸界の最重要人物の一人として、幾多の批判攻撃にさらされて来た豊子愷がそれ知らない訳はない。身動きの取れない軟禁状態に置かれた晩年の豊が、同書を敢えて再解釈しようとする姿は自身の人生の総仕上げを行おうとしているかのようである。豊子愷は終戦時、台湾への移住をも視野に台湾視察の旅に出ているが、最終的には台湾ではなく新中国を選択した。豊は自らの思想的根幹とも言うべき仏教との縁を繋いだ『大乘起信論新釈』を再度解釈し、翻訳という作業をすることで、共産党政権に理想を託した自らの選択について振り返ろうとしていたのかもしれない。

一九七二年末、豊子愷は所属機関である中国画院の工宣隊より「解放」を告げられた。もともと、この「解放」とは豊子愷が息子の豊新枚を安心させるために用いた言葉に過ぎず、実際に画院から下された審査結果は、これ以

降は「反動學術權威と扱わず、情狀酌量の上、生活費を發給する」というもので、実際には給与や生活待遇の面では本来の「解放」に及ぶものではなかった。⁽⁴⁸⁾

こうした画院側の対応の変化の背景としては、一九七一年九月の林彪のクーデター失敗以降、周恩来を中心とした社会秩序再建の動きが考えられる。しかし、一九七三年九月末頃より四人組ら文革派が周恩来に対する攻撃の一環として批林批孔運動を展開するにあたり、豊子愷の立場はまた悪化していく。一九七四年二月には各地で「黒画展覧会」が開かれ、多くの画家が非難された。これもまた、周恩来への攻撃を意図してのことであった。⁽⁴⁹⁾ 豊子愷も上海市委員会書記の徐景賢により批判対象とされたが、この展覧会について豊はこのような「わざわざ粗探しをする」やり方は、文革初期には新鮮だったが、今では皆もう飽きてしまい、お笑い種だと述べている。⁽⁵⁰⁾ この展覧会を見学した巴金も、豊子愷と同様な感想をいだいた。巴金は当時を回想して、その「黒画展覧会」によって、権力さえあればどんな道理も罷り通る現状と、自分の頭で考えることの重要性を改めて思い知ったと記している。⁽⁵¹⁾

その後も「文革の成果を強固にする」ための批判大会がしばしば開催され、豊子愷は常にその対象の一人とされた。そうした状況にも関わらず、文革後半には次第に豊の書画を求める人が増え始めた。創作を禁じられている豊子愷にとって、これは危険な行為であったが、豊は求められれば書画を創作し、贈呈した。それは、豊子愷自身の言葉借りるならば、文革中に当局によって「毒草」と認定された作品を再び創作することは即ち「文化大革命の輝かしい成果の否定」に他ならないからであった。⁽⁵²⁾

豊子愷が不意の自宅搜索を恐れる家族に何度懇願されても創作活動や仏教書の翻訳、作成を止めなかったのは、正にそれが文革の否定であり、また自己のこれまでの軌跡の肯定に他ならなかったからである。豊は秘密裏に創作活動を続けることで、精神の安寧を保っていたのであろう。早朝の創作活動は、行動を規制された豊子愷にとっ

て、その精神の自由を実践しうる唯一の場であった。これについて、豊は創作活動を続けているおかげで「小さな建物にひっそりと暮らしていても、憂鬱では無⁽⁵³⁾く、また「幸いにも精神生活が豊か」なので、「解放」の噂が現れては消えても「十分に耐えられ」たと述べている。⁽⁵⁴⁾

しかし、豊子愷が「解放」を待ち望んでいたのも事実である。豊子愷は行動の自由を取り戻し、第二の故郷である杭州と、末子豊新枚の住む石家庄を訪問する日を切望していた。⁽⁵⁵⁾ 長期の軟禁生活と肺病の影響で、「解放」直後、豊子愷の体力はかなり衰えていた。残念ながら石家庄の訪問は実現しなかったが、一九七三年三月には杭州、次いで一九七五年四月には故郷の石門湾を訪れることが出来た。豊子愷が肺癌により死去するのは、石門湾訪問からわずか五ヶ月後のことであった。豊の名誉が正式に回復されたのは没後、一九七八年六月のことである。

おわりに

文革当時、豊子愷は自身への理不尽な批判や攻撃にも拘泥せず、危険を承知の上で秘密裏に創作活動を続け、文革という異常事態に冷静かつ客観的に処した。豊のこのような達観的な処世姿勢は、当時、巴金ら多くの知識人が「独立思考」を放棄し、感情を麻痺させることで救われようとしたのとは対照的である。⁽⁵⁶⁾

戦前から国民的作家として活躍した巴金は、新中国建国後も政治的要職を歴任し、知名度や社会的立場、経済状況などの点で豊子愷をはるかに凌いでいた。文革時には前述のように豊子愷、周信芳とともに上海の三大攻撃対象とされていたが、上述のような理由から巴金が受けた批判攻撃はある意味では豊子愷よりも激しいものであったと言えるかもしれない。前述の楊鳳城は巴金を第二類型「自責と罪悪感を抱くタイプ」、特に「旧社会を経てきた知識分子」に分類する。楊鳳城はこのタイプの特徴として、自らの出身や経歴に対する「根深い罪悪感」を指摘して

いるが、この点について巴金自身も文革後に記した『隨想録』で次のように述べている。⁽⁴⁷⁾

思うに、私は官僚地主の家庭で育ち、旧社会、旧家庭のいろいろの教育を受け、実に多くの旧社会、旧家庭の人たちと接触してきたため、私には、封建地主の目で人を見、物事を見る可能性が大いにあった。考えれば考えるほど、「造反派」に理があるように思われ、考えれば考えるほど、自分に罪があるような感じがした。お前は地主階級の「孝子賢孫」だと言われれば、私はそれを認め、お前が『激流』を書いたのは、地主階級のためにその功德をたたえたのだと言われれば、これまた認めた。(中略) そのとき想ったのは、自分は二十三歳までずっと生家で養育してもらい、食べるためのお金もすべて農民の血と汗の結晶だったのだから、つるし上げにあうのも当然ではないか—ということだった。(中略) 六六年九月以後、「造反派」の「誘導」と威嚇の下に(あるいは、むちを使つての誘導の下に)、完全に他人の頭で考え、他人が「打倒巴金!」と叫べば、私も右手を高く挙げてこれに唱和した。

前述のように、文革で攻撃打倒すべき対象とされた「牛鬼蛇神(妖怪変化)」の一番目は地主で、最後の九番目は反動的學術權威すなわち知識人である。ブルジョワジー家庭出身の知識人、巴金が文革の熱狂のなか、自らの出自を恥じ、自らを打倒され改造されるべき人間と思ひこまされてしまったのも已むを得ないことでもあった。

それに対して豊子愷の場合、父豊鎮(一八六五—一九〇六)は一九〇二年に科挙の郷試に合格し挙人とはなったものの、母の喪に服す必要から更に上級の会試を受験することが出来ず、一九〇五年に科挙が廃止されたため、任官が叶わなかった。父は豊子愷が幼い頃に亡くなったため、決して裕福な家庭ではなかった。実家は染物屋を営み、また少しの田畑も有していたようで、決して新中国における所謂「良い」出身とされた貧農家庭ではなかったが、少なくとも巴金のような「悪い」出身ではなかった。この点において、豊子愷は状況的に巴金よりも恵まれて

おり、それが後述のように豊が冷静に状況を見つめ、対処することの出来た一因であったかもしれない。

豊子愷は文革当時、自由に行動する権利を剥奪されてはいた。しかし、豊の精神の自由を奪うことは誰にも出来なかった。それは豊子愷が現実を超越し、現実とは別の世界を有していたからである。豊子愷のこのような態度は如何にして培われたのだろうか。以下、その思想的背景について考察してみたいと思う。

一九六七年の冬、豊子愷は最愛の息子、豊新枚の結婚を祝して詩「賀新枚結婚」を詠み、「胸襟須広大（心は広く大きくもつべし） 世事似浮雲（世事は浮雲の如し）」と述べている。⁽⁵⁸⁾ また、同時期に豊新枚のために詠んだ別の詞「送新枚赴石家庄」にも次のような一節がある。

胸襟須寛広（心は大きく広くもつべし）

達観以為宝（達観はすべてに勝る）

詩中多樂地（詩中に多くの楽しみあり）

醉郷不知老（酔の境地に老いを知らず）⁽⁵⁹⁾

これらの詩には、豊子愷の超然たる心理状態を理解するための鍵がいくつか示唆されているように思う。それはまず「世事は浮雲の如し」と考え、いたずらに焦るのではなく、心を広く大きく保ち、達観の境地に到達することである。豊子愷はまた「詩中多樂地、酔境不知老」と詠い、その秘訣は詩と酒にあると述べた。これは無論、詩や酒の世界に逃げて現実を紛らわせるという意味ではない。豊は自らが「詩中」「酔の境地」に遊ぶことで、文革の過酷な現実を超越したように、自らに連座して不本意な状況に追いやられた息子にも、そうすることで現実を超越し、おらかな心で時を待つよう、語ってみせたのである。

当時、知識人のなかには耐え難い現実に自殺を選ぶ者も多く現れた。しかし、何としてもこの過酷な時間を生き

抜くには、現実を遠く離れた所に、何者にも邪魔されることのない自らの世界、自由な精神世界をもつしかないことを豊子愷はそれまでの経験から知っていた。豊子愷がこのような境地に至った背景として、戦前から親炙していた馬一浮⁽⁶⁰⁾の影響が考えられる。豊子愷は馬一浮の影響により、抗日戦の心理的苦悩を乗り越えることが出来た。その折に学んだ、理想の境地を現実とは別の世界に求め、身は現実世界にありながら、心のうちに理想郷を求めるといふ姿勢は文革時にも豊子愷を救ったのである。

中華民国期、特に抗戦期には豊子愷のこうした思想や自由主義は理想主義的、現実逃避的であるとして、急進的な共産主義者からは揶揄され、批判された。個人の自由や精神性を賛美する豊の思想が、国難の時期に厳しく批判されたのも無理のないことであった。しかし、豊子愷はこのような時代にも散文やイラストを通じて、精神の自由を主張し、自ら実践して見せた。文革期は、個人が攻撃の対象とされるといふ点において、ある意味では抗戦期よりも更に過酷な時代であったと言える。しかし、それにも関わらず、豊子愷が精神的自由を追求して止まなかったのは、それが豊にとって何者にも代えがたい重要なものであったからである。豊子愷が文革の時期を超然たる態度で過ごしたのも、秘密裏の創作活動を続けることで、心のうちに密やかなる理想郷を求め続けたからではないだろうか。

本研究は科研費（基盤研究（C）17K02465）「豊子愷による『源氏物語』の中国語訳——意図的改訳およびその要因について」の助成を受けたものである。

(1) 反右派闘争とは一九五七年に共産党主席の毛沢東が発動した対権力闘争を指す。一九五六年、建国後の社会主義改造過程で萎縮していた知識人の積極化を意図して、同年五月に中国共産党宣伝部長の陸定一によって「百花齊放・百家争鳴」方針が提出され、思考や創作、批判の自由が提唱された。当初の反応は極めて消極的であったが、翌五七年五月に更に「言者無罪」方針が出されると、党と政府に対して予想以上に厳しい意見や不満、批判が寄せられた。これに対して同年六月、毛沢東は方針を一転させ、急遽「反右派闘争」が展開された。党や政府に批判的な発言は反党・反社会主義の「毒草」であるとされ、そうした発言をした知識人の多くが思想改造のために辺境での労働改造に送られ、死亡者も多数出現した。

(2) 大躍進とは反右派闘争で党内主導権を奪回した毛沢東により施行された社会主義建設運動である。農工業の大増産と、経済面で一五年以内に英米諸国を追い越すことを目標としたが、非現実的な計画や権力闘争により国家全体に大混乱をひきおこし、産業やインフラ、環境の著しい破壊損失を招いた。一九五九年の大洪水や旱魃の影響もあって、大躍進は数千万人にもおよぶ餓死者を出す程の深刻な飢饉と経済危機に終った。毛はこの政策の失敗を認め、一九五九年に国家主席を辞任した。

(3) 「文芸講和」とは一九四二年五月に延安で行われた文芸座談会での毛沢東の講和をまとめたもので、翌年一〇月一九日付『解放日報』に公表された。「文芸講和」では文芸の政治への従属、工農兵（労働者・農民・兵士）への奉仕が強調された。

(4) 陳伯達（一九〇四—八九）福建省惠安出身。一九二七年中国共産党に入党。抗日戦争中、延安で毛沢東の秘書を務め、以後『毛沢東選集』の編集に携わる。一九六六年「五・一六通知」起草し、中央文革小組の組長として文化大革命を指導。一九六九年頃から林彪を積極的に支持し、毛沢東の批判を受け、一九七三年に党を除名。一九八一年の林彪・四人組裁判で有罪判決を受け、釈放後に病死。

(5) 楊克林編著、樋口裕子・望月暢子訳『中国文化大革命博物館（下巻）』柏書房、一九九六年、四五—一頁。

(6) 楊鳳城「文革期の知識人——その苦悩と心理——」、『特集 文化大革命再検討』（アジア遊学 No.88）勉誠出版、二〇〇四年、四七—六六頁。

(7) 陳白塵（一九〇八—九四）江蘇省淮陰出身。本名は陳增鴻。一九二六年中国国民党に加入するも、翌年の上海クーデターに不満を抱き脱党。その後、田漢に従い南国社に参加し、一九三〇年には左翼戯劇家連盟に、また一九三二年には中国共産党青年団に

加入。同年、白色テロにより投獄される（一九三五年出獄）。抗日戦開始後は各地で戯劇の創作と抗日戦宣伝工作に従事。新中国成立後に中国共産党に加入し、上海市文連秘書長などの職務を歴任。一九五三年に中国作家協会秘書長。文革後は南京大学教授・中国文学部主任や中国戯劇協会副主席、中国影家協会名誉理事など。

(8) 謝冰心（一九〇〇—一九九）福建省福州出身。本名は謝婉瑩。キリスト教徒の家に生まれ、一九一八年にキリスト教系の華北協和女子大学（後の燕京大学）予科に入學。一九二二年文学研究会に参加。一九二三年燕京大学を卒業、米国ウエルズリー大学に留學。一九二六年に帰国し、燕京大学や清華大学などで教壇に立つ。戦後、夫の呉文藻（燕京大学教授、社会学者）が中華民国駐日軍事代表団政治組長・国際連合対日委員会中国代表顧問となったため、一九四六年から五年まで日本に滞在。文革時には呉文藻とともに批判対象とされ、一九六九年から「牛棚」（注37参照）に入れられ、一九七〇年には湖北省咸寧の「五七幹部学校」（幹部の思想改造のための下放・労働施設）に収容された。一九七一年のニクソン訪中に際して、謝冰心は呉文藻とともに解放された。

(9) 夏衍（一九〇〇—一九五）浙江省杭州出身。本名は沈乃熙、字は端先。一九二〇年日本留學。一九二四年に日本で孫文と知り合ひ、国民党に加入。国民党駐日支部常務委員兼組織部長となるが、後に党籍除名。一九二七年に帰国し、中国共産党に参加。一九三〇年に中国左翼作家連盟を結成し、執行委員となる。演劇・映画の主要な指導者の一人として、新中国では國務院文化部副部長、文化部顧問、対外友好協会副会長、全国文連常務委員・副主任、影家協会主席・名誉主席などを歴任。文革中は八年間投獄され、右脚を骨折。文革後は一九七九年中国影家協会主席、一九八二年中共中央顧問委員会委員などを歴任。

(10) 費孝通（一九一〇—二〇〇五）江蘇省呉江出身。中国の社会学・人類学の基礎を築いた。燕京大学で呉文藻に師事。一九三五年清華大学大学院を卒業し、一九三八年ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスにて博士号を取得。帰国後は雲南大学、西南連合大学、清華大学などの社会学教授を経て、一九五二年以降は中央民族学院副院長、中央常務委員、中央文京部部长、國務院專家局副協調などの要職を歴任。反右派闘争で批判対象とされ、それ以降は學術の自由を剥奪され、文革時にも激しい攻撃批判にさらされた。文革終結後は中国社会学学会会長や第七・第八回全国人民代表大會常務委員会副委員長、中国人民政治協商會議第六回全國委員会副主席などを歴任。

(11) 弘一法師（一八八〇—一九四二）勅令省天津県出身。本名は李文涛、字は息霜、号は叔同、晚晴など。法名は釈演音。弘一は

出家後に用いた号。南山律宗第一一代祖師。天津の裕福な名家の出身であったが、一八九八年に戊戌の政変に関与した廉で母や妻子と上海へ移住。一九〇一年南洋公学経済特科班に入学し、蔡元培に師事するも翌年退学。一九〇五年に単身で日本に留学し、東京美術学校（現、東京藝術大学）西洋画科撰科に学ぶ。一九一一年に帰国後は天津や上海、杭州などで美術教員を務めるが、一九一八年に出家。豊子愷は浙江省立第一師範学校時代の教え子である。

(12) 豊子愷の絵画作品は中国で「子愷漫画」と称されることから、日本でも一般に「漫画」と呼ばれているが、それは現在のいわゆる漫画とは異なり、むしろイラストと呼ぶに相応しいものである。そのため小論では、豊子愷の絵画作品については、固有の作品名を除いてはイラストと総称する。

(13) ここでいう「奥地」とは、一九三七年以降に都市在住の知識人の大多数が移住した国民党勢力地区を指す。共産党勢力地区を指す「解放区」に対して、「大後方」ともいう。

(14) 『護生画集』とは豊子愷が恩師弘一法師との約束に基づき、半世紀近い年月をかけて完成させた画集（全六巻、計四五〇幅）である。各巻の制作年度と収録作品数はそれぞれ一九二九年（五〇幅）、一九三九年（六〇幅）、一九四九年（七〇幅）、一九六〇年（八〇幅）、一九六五年（九〇幅）、一九七三年（百幅）で、第六巻は文革中に秘密裏に作成された。仏教や儒教を中心に倫理性の高いイラストと題詩から構成されており、題詩の作成や書写は巻によって異なるが、イラストはすべて豊子愷の作品である。各巻の内容や作成経緯等については以下の小論で論じた。

・大野公賀「『護生画集』解題（一） 豊子愷の仏教婦依から第一集まで」『東洋文化研究所紀要』第一六二冊、二〇一二年一月、一五三頁。

・大野公賀「豊子愷『護生画集』解題（二） 心の自由を求めて」『東洋法学』第五七巻第二号、二〇一四年一月、一四五—一七三頁。

(15) 豊子愷「『源氏物語』訳後記」、『豊子愷全集』海豚出版社、二〇一六年、第五巻、二二二頁。

(16) 四清運動とは一九六〇年代に毛沢東の指導によって行われた社会主義教育運動で、当初は人民公社の帳簿・倉庫・財産・労働点数の四点を清めるという意味であったが、毛沢東はこれを政治・経済・組織・思想の四つを清める運動へと転換。劉少奇ら而走

資派（資本主義の道を歩む実権派）と規定した。

(17) 文潔若「『源氏物語』はいかに訳されたか」、『人民中国』二〇〇六年六月号。

<http://www.peoplechina.com.cn/main/doc/html/fangyan/200606.htm> 二〇〇九年一月十七日参照。豊子愷よりも先に人民文学

出版社から『源氏物語』の翻訳を依頼されながら、遅筆の故に担当変更を余儀なくされた銭稻孫や、政治的理由から翻訳者選ばれなかったものの、豊子愷の原稿の校訂を人民出版社から依頼された周作人と『源氏物語』の翻訳の関係については、呉衛峰「『源氏物語』の中国語訳 豊子愷訳の成立を中心に」（日本比較文学会編『越境する言の葉』彩流社、二〇一一年）、呉衛峰「銭稻孫と日本古典文学の中国語訳——『源氏物語』『桐壺』巻の訳を中心に——」（『比較文学』第五五巻、二〇一三年三月三十一日）、楊曉文「中国における『源氏物語』全訳の成立に関する一考察——豊子愷、銭稻孫、周作人のかかりを中心に」（『中国研究月報』第六六巻第二号、二〇一二年二月）に詳しい。

(18) 藤井省三『魯迅事典』三省堂、二〇〇二年、二五九―二六〇頁。

(19) 陳星編著『年譜』、前掲『豊子愷全集』第五〇巻、一七三―一七四頁。

(20) 劉少奇（一八九八―一九六九）湖南省寧郷出身。一九二一年中国共産党に入党、一九五九年国家主席に選出される。大躍進について、一九六二年一月「七千人大会」で党中央の責任を認め、その後は党総書記の鄧小平とともに経済調整政策を実施し、経済の回復に努めた。文革期には、劉少奇は鄧小平とともに「資本主義の道を歩む実権派」の中心として、徹底的な批判攻撃の対象とされた。一九六八年一〇月の中国共産党第八期中央委員会第一二回全体会議で、劉少奇は「敵の回し者、裏切り者、労働貴族」として中国共産党から永久追放・除名処分となり、完全に失脚。文革中に病死するが、その死は一九八〇年の名誉回復まで、一部の高級幹部以外には秘密にされていた。

(21) 豊子愷「我作了四首詩——在上海第二次文代大会上的发言」、前掲『豊子愷全集』第五巻、一九八―一九九頁。

(22) 原文は「花不知名分外嬌」。南宋の詞人、辛棄疾の作品『鷓鴣天・東陽道中』の一節。

(23) 豊子愷「阿咪」、前掲『豊子愷全集』第三巻、八九―九一頁。初出は『上海文学』第三五期（一九六二年八月五日）。

(24) 羅洪「懷憶豊子愷」、鐘桂松・葉瑜孫編『写意豊子愷』一九九八年、二四四―二四六頁。

- (25) 『阿咪』、上芸司上海中国画院紅旗革命造反隊・工総司城建局水泥成品廠工人革命造反大隊・上海市業余大專院校革命委員會「業余会」編集『砸爛黑画院』（毒画毒文毒詩毒章批判專輯 第五集）、一九六七年、三三—三四頁、五一—五二頁。『我作了四首詩——上海第二次文代会上的發言』、同上、五三—五四頁。
- (26) 同上『阿咪』五二頁。
- (27) 鄧小平は一九六二年七月七日、共產主義青年團第三回七中全会の席で農業生産管理政策の調整問題について語った際に「黃猫（トラ猫）でも黒猫でも鼠を捕まえるのが良い猫だ」という、出身地四川に古くから伝わる俗語を引用して、農業生産の回復について論じた。
- (28) 豊子愷との思い出を記した隨筆で、巴金（注29参照）は「百花齊放・百家争鳴」方針に関する豊子愷の一九六二年五月八日の發言や「阿咪」について「この老芸術家は、心の中にしまっておいた幾つかのことを穏やかに語ったにすぎず、生活の楽しみを語り、仕事のやり方を話しただけだった。氏は、何かに「反抗」しようとか、何かを「攻撃」しようなどは夢にも考えなかったのだ」と言及している。巴金「懷念豊先生」『隨想錄』北京三連書店、一九八七年、三六七頁。日本語は、巴金著・石上詔訳『眞話集』（筑摩書房、一九八四年、五四—五五頁）による。
- (29) 巴金（一九〇四—二〇〇五）四川省成都出身。本名は李堯棠、字は芾甘。大地主家庭の出身であるが、五四運動に影響を受けて上海で革命運動に参加。一九二七年フランスに留学。留学中に執筆した長編小説「滅亡」を帰国後に発表して文壇に登場。これ以降、作家生活に入り、多数の長編小説を執筆。抗日戦争中は重慶や桂林で執筆活動を続ける。中華人民共和国建国後は中国作家協会副主席などの要職に就いたが、文革では厳しい批判を受け、一九六六年に失脚。文革終結後は中国人民政治協商會議全國委員會副主席や中国作家協会主席などの要職を歴任。エッセー集『隨想錄』全五巻（一九七七—一九八六）で、産党の文革政策や文革に関して厳しい自己批判を行い、また文革後の反動的な風潮に対しても冷静な批判を加えた。巴金の文革体験については、福岡愛子『文化大革命の記憶と忘却 回想録の出版にみる記憶の個人化と共同化』（新曜社、二〇〇八年）に詳しい。
- (30) 周信芳（一八九五—一九七五）浙江省慈溪出身。本名は周士楚、信芳は字、芸名は麒麟童。京劇界の代表的人物。代々京劇俳優の家柄で、一九一九年頃から演目の刷新に着手、後に「麟派」と呼ばれる芸風を確立。抗日戦争時には抗日救亡運動に参加し、

一九四九年一月一日の建国の際には梅蘭芳らとともに天安門での式典に参加。新中国では全国人民代表大会代表や上海京劇院院長などの要職を歴任し、一九五九年に中国共産党に加入。一九六〇年代以降、文芸に関する意見の相違から江青らの批判を受ける。一九六八年に逮捕され、翌年から自宅軟禁となるが、一九七五年に病死。

(31) 張春橋(一九一七—二〇〇五) 文革の主導者である四人組の一人。一九三八年共産党に参加。一九五八年に発表した「破徐氏三階級法権思想」が毛沢東の称賛を受け、翌年には上海の党委員会に赴任。一九六六年に江青によって中国共産党中央文革小組副組長に抜擢され、翌年には王洪文、姚文元とともに上海市政府と上海市党委員会的首脳部を糾弾失脚させ、文革の発動に関与。毛沢東の死後、一九七六年一月に四人組の一人として逮捕。一九八一年には最高人民法院特別法廷で執行猶予付き死刑判決となるが、一九八三年に無期懲役、終身の政治権利剥奪に減刑。一九九七年に再減刑を受け、翌年には仮出所。二〇〇五年に病死。

(32) 方堅『風雨憶故人——豊子愷先生在、文革、中』、前掲『写意豊子愷』一二〇頁。

(33) 『砲彈作花瓶』是鼓吹和平主義的代表作』、前掲『砸爛黑画院』四四—四五頁。

(34) 豊一吟ほか『豊子愷伝』浙江人民出版社、一九八三年、一六三—一六五頁。

(35) 豊一吟『瀟洒風神 我的父親豊子愷』華東師範大学出版社、一九九八年、一〇九頁。

(36) 文革中の豊子愷に対する攻撃や画院とのやり取りについては、豊が息子の豊新枚に宛てた書簡(前掲『豊子愷全集』第一九卷、四二—一四四頁)に詳しい。

豊新枚(一九九三—二〇〇五)は豊子愷の末子で、一九六四年に天津大学を卒業後、上海科学技術大学外国語研修部で日本語を修めた。一九六六年に卒業した後は同校で教職に就く予定であったが、豊子愷に連座して自宅待機の身となり、一九六八年に河北省石家庄の製薬工場に労働者として就職した。自分自身への批判や攻撃は一切意に介さなかった豊子愷にも、これは耐えがたく辛い出来事であった。

(37) 「牛棚(牛小屋)」とは文革期に批判攻撃の対象者が拘禁された労働改造所を指す。

(38) Barne, Geremie. *An Artistic Exile: A Life of Feng Zikai (1898-1975)* (Univ. of California Press) 2002, p.330. 前掲『砸爛黑画院』では全九四頁のうち二七頁(三一—五七頁)が豊子愷批判に割かれている。

- (39) 前掲、陳星編著「年譜」、一二三頁。
- (40) 潘文彦「豐子愷先生的胡須」、前掲『寫意豐子愷』一三〇頁。
- (41) 豊一吟(一九二九年生)は豊子愷・徐力民夫妻の四女。兄弟のうち最後まで両親と暮らし、建国後は豊子愷の日本語やロシア語の翻訳に協力し、また台湾はじめ各地への旅行にもしばしば同行するなど、豊子愷の晩年を最もよく知る人物である。
- (42) 前掲、豊一吟ほか「豊子愷伝」一六五―一六六頁。
- (43) 前掲、陳星編著「年譜」、一二四頁。
- (44) 『縁縁堂統筆』は一九七三年には『往時瑣記』と名付けられたが、同年『続縁縁堂隨筆』と改名、最終的に『縁縁堂統筆』となった(豊陳宝・豊一吟編『豊子愷文集』第六卷、浙江文芸出版社・浙江教育出版社、一九九六年、六五三頁)。尚、同書は豊子愷の死後に出版されたが、一九八三年五月に全三三篇のうち一七篇が『縁縁堂隨筆集』(豊一吟編、浙江文芸出版社)に収録され、後に上記『豊子愷文集』(浙江文芸出版社・浙江教育出版社、一九九二年六月初版)にて初めて全文が公開された。
- (45) 豊子愷「『敝帚自珍』序言」、前掲『豊子愷全集』第四卷、三二四頁。豊子愷「敝帚自珍」、前掲『豊子愷全集』第四一巻、九七―一九八頁。同書に収録された百幅の絵も豊子愷の生前には出版されることはなかった。
- (46) 「大乘起信論」は馬鳴菩薩の作と伝えられるが、同書には漢訳しかなく、梵文原典も西蔵訳も存在しない。著者の馬鳴を「仏所行讚」の著者の馬鳴菩薩とする説は、今日ではほとんど否定されている。同名異人の馬鳴の作とするインド撰述説と、中国国内で作成されたとする説があり、現在も結論は出ていない。総合仏教大辞典編集委員会「総合仏教大辞典」法蔵館、一九八七年、三〇頁。
- (47) 前掲『豊子愷全集』第一九巻、九六頁(一九七一年六月二七日「致豊新校、沈綸 一〇〇」)。
- (48) 同上『豊子愷全集』第一九巻、二二二―二三三頁(一九七二年二月三〇日「致豊新校、沈綸 一二二」)。
- (49) 武内実編『中国近現代論争年表 下』同朋舎出版、一九九二年、七〇四頁。
- (50) 前掲『豊子愷全集』第一九巻、一三四頁(一九七四年四月二四日「致豊新校、沈綸 一六五」)。
- (51) 前掲、巴金「懷念豊先生」三七〇―三七一頁。

- (52) 前掲『豊子愷全集』第一九卷、一三九頁（一九七四年九月四日「致豊新校、沈綸 一七一」）。
- (53) 同上、一一五頁（一九七二年八月四日「致豊新校、沈綸 一三一」）。
- (54) 同上、一一五頁（一九七二年八月四日「致豊新校、沈綸 一三一」）。前掲『豊子愷全集』第二〇卷、一一四頁（一九七一年八月二十六日「致常君実」）。
- (55) 前掲『豊子愷全集』第一九卷、一一三頁（一九七二年六月二日「致豊新校、沈綸 一二八」）。
- (56) 前掲、巴金「懷念豊先生」三七〇頁。
- (57) 巴金「十年一夢」、前掲『隨想錄』三七八—三七九頁。日本語は前掲、巴金著・石上韶訳『真話集』（六七—六八頁）による。
- (58) 豊子愷「賀新校結婚」、前掲『豊子愷全集』第六卷、二四一頁。一九六七年二月に豊新校は沈綸と結婚。
- (59) 豊子愷「送新校赴石家庄」、同上、二四一—二四二頁。豊新校は結婚の翌年四月に石家庄の職場に配属された。妻の沈綸の配属先は天津であったため、二人は長期に渡り別居を余儀なくされた。
- (60) 馬一浮（一八八三—一九六七）浙江省会稽（現紹興）出身。原名は浮、字は一佛、幼名は福田、号は湛翁、鐳翁、鐳叟、鐳劇老人など。新儒家学派の代表的人物で、梁漱溟や熊十力とともに「新儒学三聖人」と称される。一八九八年に魯迅や周作人らとともに科挙の県試を受けて首席合格。翌年上海で外国語を学び、一九〇三年米國に、また一九〇四—〇五年日本に留学。帰国後は孫文の辛亥革命を支持。一九一八年蔡元培の依頼により北京大学文化学科長となるが、大学当局との意見の相違から退職。抗戦期には浙江大学教授や復性書院院長などを務める。戦後は上海文物保管委員会委員、浙江文史館館長、中央文史館副館長などを歴任。文革期には反動的學術權威として批判攻撃され、不遇のうちに病死。
- (61) 馬一浮の豊子愷への思想的影響については、大野公賀『中華民国期の豊子愷 芸術と宗教の融合を求めて』（汲古書院、二〇一三年）で論じた。